

- (5) 「清明心の発生」『シリーズ古代の文学』3所収
 (6) 日本古典文学大系『日本書紀』
 (7) 古橋信孝『古代歌謡論』IV「詩の発生」

うけひ神話をめぐって 発表・討議総括

古代文学の表現史を『記』、『紀』のウケヒ神話から考えようとするときに、われわれが設定した問題は次の二点であった。一つは、
 〈ウケヒ神話〉が『記』、『紀』本文、一書群のなかで見せる相違を、神話の構造（構成）というレベルでとらえ、それを〈表現史〉として定位しなおすということである。いいかえれば、旧来〈正伝―異伝〉という形であつかわれ、そこから本来的な伝承を探りだすといった実態的な視点にたいして、あくまでも言語表現の論理として神話の構造（構成）をあつかうということだ。そしてもう一つの問題は、〈ウケヒ神話〉のなかに見られる韻律的な表現をどうとらえるのか、ということである。韻律的な表現は、とくに『古事記』のなかに顕著なのだが、それを口誦的な表現の残存とみて、『紀』のほうではそれが文字表現のなかで散文化する、という具合にこれまで考えられていた。それは語りから散文へ、口誦から文字へという発想でもあるわけだが、はたしてそういう考え方で『記』、『紀』をとらえていいのか、ということがここでの課題となった。

日高学の論文は、主に前者の問題をあつかい、後者の問題については呉哲男の論文が答えようとしている。いうまでもなく両者の問題はべつべつのものではなく、後にふれるように、〈表現史〉と

いう方法が、いわゆる表現ということと、それによってあらわされる世界像との関わりをどう統一できるのか、そしてそれをどのように史という時間性（展開）として位置づけていけるのか、といった重要な課題とクロスするのである。

*

日高学「ウケヒ」神話の構造と表現 諸伝の比較から原伝の追求、「ウケヒ生み」の祝儀の想定というこれまでの論議にたいして日高論文は、まず〈ウケヒ〉による「子生み」が、国造層を中心とする氏族を系譜的にアマテラス神の血縁として結びつける「王権の地方支配に対する配慮」がこの神話の背景にあることを強調する。そしてほぼ同じような視点から、〈ウケヒ〉によって判断されるのがスサノヲの「清明心」という「政治的倫理概念」であった点に着目する。なぜなら「清明心立証」とは、「出雲系の神」を「高天原神話」のなかに組み込むときの論理であり、それはまた、「原生的神話」である宗像三神の誕生を語る始祖譚を、アマテラスとスサノヲの支配―服属の構造に入れ込むための論理であると見るからである。このような日高の論は、口頭発表のあとの共同討議（以下「討論」と略す）でも指摘されたように、実態論的な発想を引きづっていることは否めない。神話の背景にある社会構造や政治過程を無前提的にもちだすとき、その論はこれまでの「歴史学」的な神話研究の蹉跌を踏むことになるだろう。神話を言語表現としてあつかうとき、または『記』、『紀』を言語の表現史のなかに定位しなおすといったとき、まず言語表現そのものの論理がみちびきだされねばならない。その意味で日高論文が後半で、スサノヲの「ウケヒ」神話とコノハナノサクヤビメの「一夜孕み」神話との違いについて注目し

ていることは、重要な視点であったと思われる。

サクヤビメの「一夜孕み」の神話にも「誓ひて曰く」（紀・本文）という叙述があり、これも一種の「ウケヒ神話」と見ることができた。スサノヲの「ウケヒ」神話はあくまでもスサノヲの「清明心」を立証することが中心であって、その「子生み」による系譜叙述は二義的であったが、サクヤビメの神話は「一夜孕み」↓「疑い」↓「ウケヒ」↓「子生み」↓「正統なる父の立証」という叙述のように、生まれた子が天つ神の子であるかどうかを明らかにすることが主軸であったと日高は論じる。そしてサクヤビメの神話や、『風土記』の「ウケヒ酒」のように「ウケヒ」によって立証されるのが系譜上の正統性の問題であるよりも、スサノヲ神話のような「清明心」を証明する展開のほうの方が、より高度な表現であったと見ていく。「清明心」という「政治的倫理概念」を神話の表現が獲得するために、〈国家〉という抽象性を介在させなければならぬからだ。言語表現が抽象的な概念を取り込もうとするところに、表現としての新しさを見ることは正しいだろう。そのこと自体には問題はない。しかしサクヤビメの「一夜孕み」神話も『記』、『紀』の表現をくらべてみると、微妙な違いがある。つまり『記』では、たしかに「ウケヒ」は正統な父の立証↓天つ神の神統譜の叙述という構造のなかにあったが、『紀』本文、一書群では、それとともにサクヤビメの貞操の証明という話の展開があるのだ。たとえば『紀』本文での「必ず我が子に非じ」と疑いをかけられたことにたいするサクヤビメの「怒り恨みまつりて」という地の文の表現が、一書の第五では、筋の流れを前後させてニギとサクヤビメのと劇的な葛藤場面へと展開していく（この点、斉藤英喜『記』、『紀』的表現の問題）シリ

ーズ古代の文学6所収参照）。このような『紀』の表現の転移（累積）を視野にいれたとき、日高の論はどうなるのだろうか。おそらく今回の論文の重心が神話の構造という点に置かれていることにたいして、その構造の変化を支える言語表現の質、さらにいえば〈文体〉という問題への取り込みが必要となるように思われる。

*

呉哲男 うけひ神話の一形式 呉哲男はこれまで「古代文学の変革・断章」（シリーズ古代の文学6所収）、「序の技法」（『解釈と鑑賞』82年1月）などの論文で、一貫して旧来的な〈口誦から文字へ〉という発想を批判している。いわばそれは、目的論的・進化的な文学史そのものへの批判といってもよい。したがって〈表現史〉というテーマへの呉の関わり方は、われわれの提出する〈表現史〉の、旧来的な文学史と峻別されるべき地平をあきらかにしてくれるはずである。

呉論文は、まず『記』、『紀』の〈誓^{カケヒ}〉神話の「構成的枠組」として、中国古代の戦闘儀礼の一環である〈誓辞〉との対応を指摘する。いうまでもなくそれは単純な「影響関係」ということではない。〈古代国家〉の成立、いいかえれば〈文字〉を前提とした「東アジアとの均質空間の共有」、「東アジアとの一元性」を強いられる過程としてそれを見る。そして〈文字〉は、「口誦の直接的表現」を否定し、「間接的なまわり道」の表現をもたらす。すなわち「国家の内部に对他性」を作り出すことであった。『日本書紀』の成立はそこに位置づけられる。たいして『古事記』はかかる『書紀』の文字表現の水準をへて、〈文字〉を〈音声〉ことばに從属すべき、「二義的」〈抑圧の対象〉とするような位相として成立した。韻律的な

表現をもちいた『古事記』の「音声尊重」の表現方法は、『書紀』のような「抽象度の高い漢文的表現」を前提として獲得されると考えるわけだ。『古事記』から『書紀』へという通説にたいして、呉の論のもつ意味は「口誦／文字」という、実態的・一元的な対立概念を超える視角がはらまれていた点にある。もはや古代の文学史を、口誦言語から文字言語へという単線的な流れとして見ることはできないのである。しかし、そういつたとき、呉論文における「口誦言語」とはなにかという疑問がでてくる。それは「討論」においても執拗に問われたのだが、呉が立てている「口誦」の想定がいまひとつ鮮明ではないからだ。たとえば呉は『古事記』の表現を、「抽象度の高い漢文的表現」を基盤として「口誦性の価値」(前出「序の技法」)が見出された位相ととらえる。しかしそういつたとき、『書紀』の表現以前の「口誦の直接的表現」とそれはどう違うのか。換言すれば、『書紀』のような「漢文的表現」にとって「否定」されるべき「口誦の直接的表現」と、『古事記』が「価値」として見出した「口誦性」とはどのように異なるのか、ということである。そしてかかる問いは、さらにつきつめていけば、呉の論理にとって「史」(表現史)とはなんなのかというところへ至るように思われる。もっとも呉の立場は、既成の「歴史」概念を否定する地平にあってた。だから呉の方法を批判するとき、短絡的に「歴史」一般をもちだしてきても意味はない。問題は、呉自身が、つまりはわれわれ自身に置かれていた「歴史」への手ざわりの喪失感や、「歴史」からの疎外感という時代状況をどのようにとらえかえせるか、という点にかかわっている。いいかえれば「現実」的な事象の変化を、自分との関係のなかでどう意味づけたいけるのかということである。

『古事記』はたしかに「音声尊重」の表現方法をめざしていた。しかしにもかかわらず、これが「書く」という地平における表現であるかぎり、日本語が「書く」うえで土台とした漢語との関係を無視することはできない。そういう意味で、呉が指摘するように『古事記』が「抽象度の高い漢文的表現」を前提として、「逆に」音声(口誦)言語に文字言語を従属させるような位相として成立する、という考え方は重要である。しかしそのような重要な指摘にもかかわらず、呉の論文からは、なぜかかる「転倒性」が言語の表現史において必然となるのか、ということの意味づけが見えてこないように思われる。

呉論文から「表現史」の方法化という課題への展望をみちびくとすれば、次の一点である。日本語が漢字という文字を土台にして「書く」という位相へ至ったとき、言語表現は一方に「書記」としての言語の徹底化というプロセス(漢文脈)と、「誦」(語り)という言語を基層にもつプロセス(和文脈)との二重性に分裂する。そして言語の表現史は、この二重性の緊張関係を動力として展開していく。『古事記』の「音声尊重」という表現は、一方で『書紀』へと結実する「書記」としての言語の昇過程との緊張のなかで対象化された「文体」であった。このような表現史の動力である漢文脈と和文脈の二重化された緊張関係は、言葉がどのように「現実」を表現しうるか、いいかえれば言語による世界像をいかに描きうるのかということの起点にしていた。方法としての「表現史」は、たんに個々の「作品」の変化を後づけるのではなく、その変化をうながす動力としての、表現内部における緊張の意味を問うことにあると考えられる。

(齊藤英喜)